



Title	月刊DRF 第44号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2013-09-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73595
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_44.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第44号

No. 44 September, 2013

- 【速報1】ポストCSIプログラム始動！
- 【速報2】第2回 SPARC Japan セミナー2013
- 【特集1】ナマステー！！ IT大国インドの機関リポジトリは今！？
- 【特集2】発展するオープンアクセスモデル —ICOLC2013年春季大会での話題から—
- 【特集3】第15回図書館総合展「DRF10：躍動するオープンアクセス」開催決定！！
- 【好評連載】今そこにあるオープンアクセス【募集】オープンアクセスウィーク2013素材募集！

速報 ①

ポストCSIプログラム始動！

平成25年7月、「国立情報学研究所と国公私立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書」（平成22年10月）に定められた連携・協力事項「(2)機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築」に基づき、『機関リポジトリ推進委員会』が設置されました。

学術情報の円滑な流通および発信力の強化にかかる活動を推進することを目的とし、今秋から課題設定とアクションプランの立案をすすめ、国立情報学研究所「CSI委託事業」（平17～24年度）を後継する機関リポジトリ推進プログラムをリードすることになります。

速報 ②

第2回 SPARC Japan セミナー2013 レポート

2013年8月23日に国立情報学研究所で第2回SPARC Japanセミナーが行われました。当日のプログラムはこちらをご覧ください。



今回は「人社系オープンアクセスの現在」と題して、4つの講演とパネルディスカッションによる構成で開催され、SPARC Japanセミナーとしては人文・社会科学分野のオープンアクセス（以下、OA）に焦点があてられた最初のセミナーとなりました。

まず、それぞれ経済学と日本史学が専門の、お二人の研究者より講演がありました。「経済学と経済学者にとってのオープンアクセス」では、OAは経済学の視点からも理にかなったモデルであると結論づけられること、「歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス-日本近現代史研究の立場から-」では、史料画像そのもののウェブ公開など史料の多様化が進んでいること、公開サイクルも加速化しているなど、研究環境の変化についても紹介されました。「海外の動向：人社系OA誌の最前線」では、英国からMartin Paul Eve氏を招聘し、Open Library of Humanities (OLH)について、社会的、技術的、財政的といった多岐にわたる観点から、人社系OAメガジャーナルのプラットフォームを目指すあたり、理想的でありつつも現実的な課題解決方法を提示し、その一例として、プロジェクトが軌道に乗った時点で、Library Partnershipとして、1,000の図書館から1館あたり平均で600ドルを拠出いただくことをお願いしたいとの説明がありました。続く「「学術情報」と「体系的な知」のはざまで- 大学出版の模索」では、大学出版会という出版者の視点に軸足を置きつつ、自然科学分野に比べ人社系OAは遅れているという解釈は実態を伴っていないのではないかという問題提起、OAと学術書の再構築の問題、研究者の育成に至るまで幅広く論が展開されました。

後半のパネルディスカッションは「人社系OAの“これから”」と題して、冒頭、大学図書館の立場から報告があり、これにより、研究者の視点、出版者の視点に図書館の視点を加えた形で議論の土台が形成されました。そこから、OAの目的、学術コミュニケーションのあり方、研究者からの学術成果の発信と受け手側のリテラシーの問題まで、議論はフロアを巻き込み広く展開、白熱したものとなりました。

人社系OAの諸課題については、今回のセミナーを嚆矢に、対象分野をさらに広げることによりその全貌に迫る、あるいはジャーナルに絞って議論を深めるなど、様々な切り口で掘り下げていくことができるのではないかと今後の展開が期待されます。

<今村昭一（早稲田大学）>

ナマステー!! IT 大国インドの機関リポジトリは今!?



吉植 庄栄 (YOSHIUE Shoei)



インド及び訪問した三都市¹⁾



インド工科大学 デリー校



マハラジャ・サヤジラオ大学



インド科学大学院大学 JRD タタ記念図書館

「ナマステー!!(こんにちは!!)」

みなさんは最近経済発展著しいインドが、IT 大国と呼ばれるのを聞いたことはありませんか？ IT の大国であれば、それを支える教育や図書館には何か面白そうな特色がありそうではないですか。それに図書館情報学では必ず習うあの S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) を出したインドなのだから、きっと図書館も独自に発展していて学ぶ面があるような気がしませんか？

という訳で、平成 24 年 11 月末、私は一人でインドに参りました。40 歳を過ぎるまで海外に行ったことがない私にとって無謀とも思えるこの冒険は、国立大学図書館協議会の海外派遣事業によるもので、「IT 大国インドにおける学術情報流通の最新事情」を調査するものでした。今回、インドの機関リポジトリの情報をみなさまにお届けします。

1. インドの機関リポジトリ

最初にインドの機関リポジトリの概況ですが、Sawant(2012)²⁾によると、79%の機関リポジトリが DSpace を利用しています。ほとんどの機関が、ライブラリアンの主導の下、自主財源自助努力で機関リポジトリを構築しているようです。

DSpace が選ばれる理由は、Dash(2012)³⁾によると、オープンソースでカスタマイズが可能であること、大学の組織構造を階層的に表現して文献管理ができる分かり易さ、英語ではない言語でも使えるプラットフォーム等が挙げられています。また、有名な機関リポジトリには次のようなものがあります。

NISCAIR Online Periodicals Repository

首都デリーにあるインド国立科学コミュニケーション情報資源研究所 (NISCAIR(ニスケア) National Institute of Science Communication and Information Resources)が運営する機関リポジトリです。当所が発行する科学関係逐次刊行物を中心に 17,971 件(平成 25 年 7 月現在)のデータが登録されています。

Shodhganga⁴⁾

グジャラート州アフマダバードに本部がある INFLIBNET((インフリブネット)Information and Library Network)が提供する、高等教育機関を中心とする共同機関リポジトリです。136 大学等機関が加盟しており、8,100 件以上(平成 25 年 7 月現在)の学術論文が所収されています。インド国内の様々な高等教育機関がここに学術成果物を登録しはじめています。

インドのIT産業の中心にして南インドの大都市にあるカルナータカ州ベンガルールには、伝統あるインド科学大学院大学(IISc)があります。この大学には所収データ数 35,641 件(平成 25 年 7 月現在)を誇る ePrints@IISc があります。この機関リポジトリは 2002 年という、かなり早い時期から立ちあがったもので、いわばインドの老舗機関リポジトリと言えましょう。

その他

インド国内にはその他、大規模研究大学を中心に機関リポジトリの独自構築が進んでいます。例えばインド工科大学デリー校やインド統計大学などです。しかしこれらの所収件数は数千件程度であり、インド科学大学院大学やインド国立科学コミュニケーション情報資源研究所のものに比べると小規模です。今後の発展が期待されます。また CASSIR((カッシーラ)Cross Archive Search Services for Indian Repositories)⁶⁾ という複数の機関リポジトリを横断的に検索できるシステムもあります。

2. インド機関リポジトリの第一人者に関く

ePrints@IISc の立ち上げ(2002 年)から運営に携わっている、インド科学大学院大学のライブラリアン、Dr. Francis Jayakanth 氏にインタビューすることができました。彼は Richard Poynder 氏のブログ“Open and Shut? ”⁷⁾ に取り上げられているほか、EPT OA AWARD2011⁸⁾ というオープンアクセスの賞を受賞している方です。

彼によるとインドの機関リポジトリは発足が早かったのですが、資金不足の壁に当たり、思う様に支持者が増えなかったそうです。しかし近年、機関リポジトリによる学術情報の無償アクセスは、雑誌価高騰への対抗手段として有効であることが徐々に浸透してきたそうです。そして特徴的なのが S.R.ランガナタンの『図書館学の五法則』の第二法則「全ての人にその人の本を」の考えをもとにした、「全ての人にその人の学術情報を」という理念が、インド図書館関係者の共感を生み、徐々に支持者が増えているそうです。

この第二法則は閉架書庫から開架に図書を出すことで、利用者が自分の本と出会うことを促進しないとイケない、ということを訴えますが、機関リポジトリも同じで、これまで閉じられた世界(=契約しないと閲覧が不可能である商用学術雑誌)に蓄えられていた学術成果物を機関リポジトリによって公開し、利用者は探している資料を自由に入手できるようになるべきだ、とのことです。後で知ったのですが「開架」は英語で“Open Access”と言います。これを知った時には非常に感動しました。

(付記) インドといえばやっぱりカレー

機内食以外はすべてカレーを食べました。どれも美味しかったです。



Dr. Francis Jayakanth 氏(左)
彼の指導学生の Tejeshwari さん(右)



S.R.ランガナタン(右)
統計学者 P.C.マハラノビス博士(左)⁹⁾

- 1) “Google map”. (online), <https://maps.google.co.jp/>, (accessed 2013-5-6)を元に作成。
- 2) Sawant, Sarika. Management of Indian institutional repositories. OCLC Systems & Services. 2012, vol.28(3), p.130-143.
- 3) Dash, Ranjita N. Institutional Repository (IR) of the Babaria Institute of Pharmacy (BIP) Library Using Dspace Software, Knowledge, Library and Information Networking: NAFLIN2012 (edited by H.K.Kaul and Mayank J. Trivedi, delnet, New Delhi, 2012), p.274-297.
- 4) INFLIBNET. “Indian ETD Repository-ry@INFLIBNET”. (online), <http://shodhganga.inflibnet.ac.in/>, (accessed 2013-7-28).
- 5) Indian Institute of Science. “ePrints@IISc”. (online), <http://eprints.iisc.ernet.in/>, (accessed 2013-7-28)
- 6) National Centre for Science Information. “CASSIR”. (online), <http://casin.ncsi.iisc.ernet.in/index.php/>, (accessed 2013-5-6).
- 7) Poynder, Richard. “The OA interviews: Francis Jayakanth of India’s National Centre for Science Information”. Open and Shut?. (online), <http://poynder.blogspot.jp/2012/01/oa-interviews-francis-jayakanth-of.html>, (accessed 2013-4-25).
- 8) Electronic Publishing Trust for Development. “EPT OA AWARD 2011-announcing the winner!”. (online), <http://epublishingtrust.blogspot.jp/2012/01/ept-oa-award-2011-announcing-winner.html>, (accessed 2013-8-19)
- 9) プラサンタ・チャンドラ・マハラノビス(Prasanta Chandra Mahalanobis, 1893-1972)インドの統計学者、インド統計大学の創始者。S.R.ランガナタンと交友が厚かった。

特集1のインドのオープンアクセス事情に続いて、特集2も海外からの報告です。今回は今年4月に開催された国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC) の春季会合に参加された筑波大学附属図書館の斎藤未夏さんに、オープンアクセスに関するセッションについて報告していただきました！

発展するオープンアクセスモデル

—国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC) 2013年春季大会での話題から—



国公立大学図書館協力委員会による派遣事業により、2013年4月21日～4月24日にカナダのトロントで開催された国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2013年春季会合に参加する機会をいただきました。本大会で設けられた12のセッションのうち、初日の第三セッションがオープンアクセス (以下「OA」) に関するものでした。“E-Resource Battleground: Developing Open Access Models”と題されたこのセッションでは、新しいOAモデルに関する2つの発表が行われました。

1つは、米国ミシガン州の有限責任会社Reveal Digital社による電子化プロジェクト“Independent Voices”です。これは、特定の図書館が所蔵する歴史的価値の高い資料の電子化に必要な費用を、プロジェクトへの参加を表明した図書館が負担し、OA化するというものです。現在電子化が進められているのはノースウェスタン大学とデューク大学の図書館が所蔵する反体制派新聞・雑誌のコレクションで、必要経費に基づいて設定される「売上閾値」 (Sales threshold) に参加館からの資金が到達すれば、電子化されたコンテンツは2年間のエンバゴを経てOAに移行することになります。もちろん参加館は、エンバゴを経ずにコンテンツにアクセスでき、またプロジェクトに支払う金額は、(プロジェクトが見込んでいる160の図書館が参加すれば) 通常図書館が新聞や雑誌を購読するのに支払う価格よりもずっと低いというメリットがあるとのこと。

もう1つは、非営利団体である“Knowledge Unlatched” (以下「KU」) による図書、特にモノグラフを対象としたOA出版で、次のようなプロセスにより行われます。

- ① 出版社からKUに、OA化候補の図書のタイトルと金額のリストが提出される。
- ② プロジェクトに参加する図書館は、KUから伝えられたそれらの情報に基づき“unlatch”する (OA化する) 図書を選定し、KUにそのための金額 (Title Fee) を支払う。
- ③ KUは、一定数の参加館から選ばれた図書について、出版社にTitle Feeを支払う。
- ④ 出版社はその資金により当該図書の“Unlatched version” (OAバージョン) を作成し公開する。

参加館は、冊子体等の別バージョンを格安で購入することができ、また、Unlatched versionと別バージョンの両方を選んだとしても、その金額はモノグラフを個々に購入するよりも低く抑えられるとのこと。カナダからの参加者は、これらのモデルについて、電子化のための資金をいかに工面するか、またOA化した電子化コレクションに資金を投入したことをいかに正当化するかという問題を解決するものとして、高く評価していました。

北米では電子ブックのDDA (Demand Driven Acquisition; 需要駆動型購入方式) 導入や紙媒体資料の共同管理 (シェアード・プリント) への関心が非常に高く、OAセッションにおいても、電子ジャーナル以外の資料に関する話題が取り上げられていたことに少なからずカルチャー・ショックを受けました。日本では、OAを電子ジャーナルの価格高騰と結び付けて議論しがちですが、個々の大学では実現困難な貴重書等の電子化を促進するこのようなプロジェクトによって、OA化を実現する新たな道が作られつつあることは大変興味深く、2つのプロジェクトの動向に今後も注目していきたいと思っています。

<斎藤未夏 (筑波大学) >



写真：2日目の会議終了後、The Rex Jazz & Blues Barで山盛りのフィッシュ & チップスを前に。
(とても全部は食べきれませんでした。)

—用語解説—

DDAとは？

電子ブックの新しい購入モデル。PDA (Patron-Driven Acquisitions) とも呼ばれる。どのタイトルを電子ブックとして購入するかを決める際、図書館がその選定をするのではなく、ある一定期間電子ブックを無料でアクセスできるようにし、その間利用者からアクセスがあったものを購入対象として考える方法。利用したい本が購入前に分かるので、図書館員はタイトルの選定が容易になるが、これだけに頼ってはいけないという見方もある。



「DRF10：躍動するオープンアクセス」開催決定!

Announcement of the DRF 10th National Workshop



今年も全国ワークショップを図書館総合展にて開催します。記念すべき第10回。機関リポジトリの直面している課題、博士論文の公表から、オープンアクセスの変容、そして今後の機関リポジトリの向かう先。大満足な一日をお約束します。それでは、第1部から第3部の担当があふれる熱意と共にセッションをご紹介します!

第1部 博士論文公開に対する取り組み JAIRO Cloud利用推進など

大きく3つのテーマで講演します。

- JAIRO Cloudのご紹介。リポジトリ構築検討中の方は必聴です。
- 国際会議ETD 2013の報告では世界の学位論文のインターネット公表事情をご紹介。各国の事情とともに、世界のなかの日本の位置づけがわかるかも?
- 毎年恒例DRF参加機関による事例報告も行いますよ。機関リポジトリに関する活動報告なら何でもOK!!報告募集中です。博士論文公表に焦点を当てた体験談もあり。いま、博士論文が熱い!

第2部前半 Altmetrics(オルトメトリクス) 新しい論文単位利用統計の可能性

Altmetricsは、Twitter等のソーシャルメディアにおける学術情報のインパクトを定量的に測定する方法で、学術論文においては、これまでの被引用数のような論文ごとの評価を補完する新しい指標として期待されています。

本セッションでは、Altmetricsの概要、機関リポジトリにおける導入事例の紹介、日本語論文のWebにおける利用動向調査から国内の人文社会学分野における評価指標としてのAltmetricsの可能性、等についての話題を用意しています。

DRF10

第2部後半 Green×Gold!

日本国内の研究者にも着実に浸透してきているGold OA。今回のセッションはGold OA出版社バイオ・セントラル社の方をパネルに迎え、Gold OAの世界のおよび国内の動向、今後の見通しをお話いただきます。Gold OAが拡大する中、機関リポジトリや図書館はどのような役割を果たせるのでしょうか?第2部の最後には、フロア参加型のパネルディスカッションを予定しています。乞うご期待!

第3部 機関リポジトリはここまで来た、 そしてどこへ向かうのか (デジタルリポジトリ連合総会)

博士論文だけじゃない!ゴールドOAは味方なのか敵なのか?機関リポジトリ業務が指し示す研究支援ライブラリアン像とは?オープンアクセスの動きの向こうには、開拓すべきフロンティアが広がっています。平成25年7月、国公私協力委とNIIとの協定書に基づく『機関リポジトリ推進委員会』が設置されました。激動の学術コミュニケーションの中で機関リポジトリは、DRFは、私たち図書館員はどこへ向かうのか?オープンなディスカッションに参加ください!

(※本セッションはDRF総会に相当しますが、どなたでもご参加できます。)

DRF10：躍動するオープンアクセス 平成25年10月29日 午前10時～午後5時 パシフィコ横浜(第15回図書館総合展)

参加申し込み：DRFウェブサイトでの申込み(予定)

主催：デジタルリポジトリ連合 共催：国立情報学研究所(予定)

第2回

トロイの木馬かセイレーンの合唱か？ Is it a Trojan Horse or a CHORUS of Sirens?

先月号の佐藤翔さんの連載では、米国政府のオープンアクセス(OA)義務化に対応して出版社が提案するサービス、CHORUSの解説があった。本稿では、その補足として、OAの中心的論客スティーヴン・ハーナットのCHORUS批判をご紹介したい。

ハーナットによれば、CHORUSは出版社側の仕掛けた新たな「[トロイの木馬](#)」である。これはもちろんギリシャ神話の有名なエピソードにかけた比喻で、うかつに取り入れると破滅を招く危険な罠といった意味合いだろう。しかし、佐藤さんの説明にもあった通り、CHORUSは出版社自らが原稿ではなく決定版を(出版後一定期間を経た後とは言い)無料公開する仕組みである。それがなぜ危険な罠なのか。ハーナットの主張はおおむね次の通りである。

- 出版社はエンバーゴ(無料公開禁止)期間を設けることでOAの進展を遅らせようとしている。
- CHORUSの戦略は、研究者の手からOA提供のパワーを奪い、出版社がOA提供のスケジュールとインフラをコントロールしようというものである。
- OAを提供すべきは研究者であり、資金助成団体や学術機関は機関リポジトリへの掲載によるOAを義務付け、順守させるべきである。機関リポジトリはすでに多様な目的で設置されており、新たな出費は要しない。

ハーナットはさらに、米エネルギー省科学技術情報局(OSTI)シニアコンサルタントの肩書を持つデイヴィッド・ウォジック(David Wojick、ヴォイチックと発音するのかもしれない)という人物との[議論](#)を公開している。

ウォジックがCHORUSは著者によるセルフアーカイビングを不要にする効率的なOA実現方法だとするのに対し、ハーナットはエンバーゴ期間後にしかOAにならないのはOAではないと攻撃する。エンバーゴ期間中の論文も本文アクセス不可の形で機関リポジトリに掲載し、本文を読みたい人はリクエスト・ボタンにより著者に本文送付を請求する。これで「ほぼOA」が実現できる、というのがハーナットの持論だが、CHORUSではこの仕組みが機能しなくなる。CHORUSはセルフアーカイビングを排除するものではないとウォジックは言うが、エンバーゴ期間後に出版社がOAにすることで義務を果たしたことになるなら、自発的にセルフアーカイブする研究者はごく少数だろう。

ウォジックはさらに、OA義務化の指令を出した米科学技術政策局(OSTP)が即時のOAを求めているのは明らかで、ハーナットの主張は筋違いだとする。これに対してハーナットは、「12か月後に」OAにするのではなく、「遅くとも12か月後には」OAにすることが要求されているのだと反論するが、はた目にもこれはいささか分が悪い。OSTPがCHORUSという「セイレーンの呼び声(siren call)」に耳を傾けないようにと願うハーナットの気持ちがよくわかるのである。

蛇足だが、セイレーンももちろんギリシャ神話に登場する悪役で、魅惑的な歌声で船乗りを惑わす妖怪である。

栗山正光

常磐大学人間科学部現代社会学科教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー
【ReaD & Researchmap】

<http://researchmap.jp/read0195462>



オープンアクセスウィーク(OAW)2013素材募集!

オープンアクセスウィーク(OAW)はアメリカのSPARCが主催しているイベントです。7回目のOAWは10/21~10/27の1週間です。DRFでは日本国内を盛り上げるためのイベントアイデアやウェブ用の素材を募集します。

応募内容

イベントアイデア

- 私たちはこんなことするよ
- どこかでこんなことやらない?

ウェブ用の素材

- ベースはオレンジ(OAWカラー)
- ロゴまたはOAW等の文字を入れる

募集期間：平成25年9月1日~10月20日

送付先：oaw@lib.hokudai.ac.jp

*お送りくださった作品は、OAW2013 in JapanサイトおよびDRFサイトに掲載し、誰でもダウンロード・変更・再利用できるものとします

次号
予告

【特集】10月はAltmetricsが熱い! 月刊DRFを読んでイベントに出かけよう!!



Facebookやっています。

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRF読者アンケート受付中!

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

【編集後記】暑い暑い夏もようやく終わろうとしています。新しい委員会が立ち上がり、図書館総合展も間近。秋に向けてリポジトリはまだまだ熱い話題が盛りだくさんです。みなさんも是非イベントに参加していっしょに考えてみませんか? (柴田&杉山)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 宛：gekkandrf@gmail.com

月刊DRF 第44号 平成25年9月1日発行 デジタルリポジトリ連合 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>